

中国



1 農・畜産業の概況

2022年の中国の国内総生産（GDP）に占める農林水産業の割合は7.7%であり、就業人口に占める1次産業従事者の割合は24.1%となっている（表1）。

また、中国の農林水産業の総生産額は増加傾向で推移しており、22年は前年比6.2%増の15兆6066億元となった（表2）。部門別の割合については、農業（耕種）は54.1%と1980年と比較して減少した一方で、畜産業は26.0%と増加した。

表1 農林水産業の地位

(単位:億元、万人)

区分/年	1980	1990	2000	2020	2021	2022	前年比 (増減率)
GDP	4,588	18,873	100,280	1,013,567	1,149,237	1,210,207	5.3%
農林水産業	1,372	5,062	14,944	81,397	86,995	92,582	6.4%
割合(%)	29.9	26.8	14.9	8.0	7.6	7.7	0.1ポイント
就業人口	42,361	64,749	72,085	75,064	74,652	73,351	▲1.7%
第1次産業	29,122	38,914	36,043	17,715	17,072	17,663	3.5%
割合(%)	68.7	60.1	50.0	23.6	22.9	24.1	1.2ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表2 農林水産業総生産額の推移

(単位:億元)

区分/年	1980	1990	2000	2020	2021	2022	前年比 (増減率)
農林水産業	1,923	7,662	24,916	137,782	147,013	156,066	6.2%
農業(耕種)	1,454	4,954	13,874	71,748	78,340	84,439	7.8%
割合(%)	75.6	64.7	55.7	52.1	53.3	54.1	0.8ポイント
畜産業	354	1,967	7,393	40,267	39,911	40,652	1.9%
割合(%)	18.4	25.7	29.7	29.2	27.1	26.0	▲1.1ポイント
林業	81	330	937	5,962	6,508	6,821	4.8%
割合(%)	4.2	4.3	3.8	4.3	4.4	4.4	▲0.1ポイント
水産業	33	411	2,713	12,776	14,507	15,468	6.6%
割合(%)	1.7	5.4	10.9	9.3	9.9	9.9	0.04ポイント
その他	0	0	0	7,030	7,748	8,686	12.1%
割合(%)	0.0	0.0	0.0	5.1	5.3	5.6	0.3ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：総生産額は名目値。

畜産物に関し、22年の1人当たり消費量を見ると、都市部、農村部ともに牛乳乳製品と家きん肉はいずれも前年比で減少した一方、豚肉の消費量は都市部（前年比3.6%増）、農村部（同10.6%増）ともに増加している（表3）。これは、18年8月に中国で初めて発生したアフリカ豚熱（ASF）の影響により、豚肉の買い控えや家きん肉など他の食肉に消費が移行していたが、豚肉は中国の伝統的な食材であり、豚肉の供給が回復し、安定するにつれ消費が戻ったためとみられる。また、品目別に見ると、牛乳乳製品と牛肉については、都市部が農村部を大きく上回っている。これは、都市部を中心とした所得向上に伴う外食産業の普及などにより、農村部に比べて牛乳乳製品と牛肉の消費機会が増加しているためとみられる。

表3 畜産物の1人当たり年間消費量

(単位:kg/人)

区分/年	2018	19	20	21	22	前年比 (増減率)
都市部	牛乳乳製品	16.5	16.7	17.3	18.2	▲15.4%
	牛肉	2.7	2.9	3.1	3.2	0.0%
	豚肉	22.7	20.3	19.0	25.1	3.6%
	家きん肉	9.8	11.4	13.0	12.3	▲3.3%
農村部	牛乳乳製品	6.9	7.3	7.4	9.3	▲9.7%
	牛肉	1.1	1.2	1.3	1.5	6.7%
	豚肉	23.0	20.2	17.1	25.4	10.6%
	家きん肉	8.0	10.0	12.4	11.4	▲8.1%

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：家庭での消費量であり、外食や加工品による消費は含まれない。

2 畜産の動向

（１）養豚・豚肉産業

豚肉は伝統的な食材であり、中国の食肉生産量の約６割を占めている。米国農務省によると、２０２２年の中国の豚肉生産量と消費量は、いずれも世界の約５割を占めており、共に第２位のＥＵを大きく上回っている。

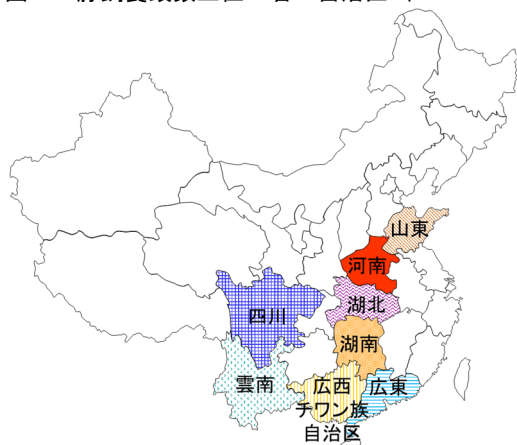
① 養豚の飼養動向

地域別の豚飼養頭数を見ると、山東省以南に多く、また、上位８省・自治区で全体の５割以上を占めるなど、地域的に偏りが見られる（図１、２）。

飼養頭数は２０１２年以降、減少傾向で推移し、特に１９年には前年に発生したＡＳＦの影響で前年比２７．５％減の３億１０４１万頭となった（図３）。その後は豚肉価格の上昇や大規模農家の増加などから飼養頭数は急速に回復し、２１年にはＡＳＦ発生前の水準を超え、２２年も同水準を維持している。

一方で、養豚農家の飼養規模は零細とされる小規模のものが極めて多く、年間出荷頭数が４９頭以下の農場が全体の９３．３％を占めている（表４）。

図１ 豚飼養頭数上位８省・自治区（２０２２年）



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」

図２ 省・自治区別豚飼養頭数（２０２２年）

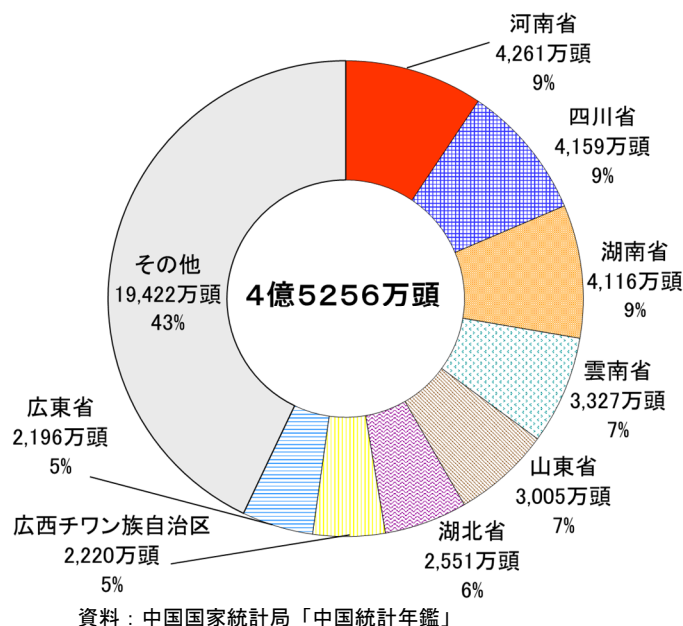


図３ 豚の飼養頭数と豚肉生産量の推移

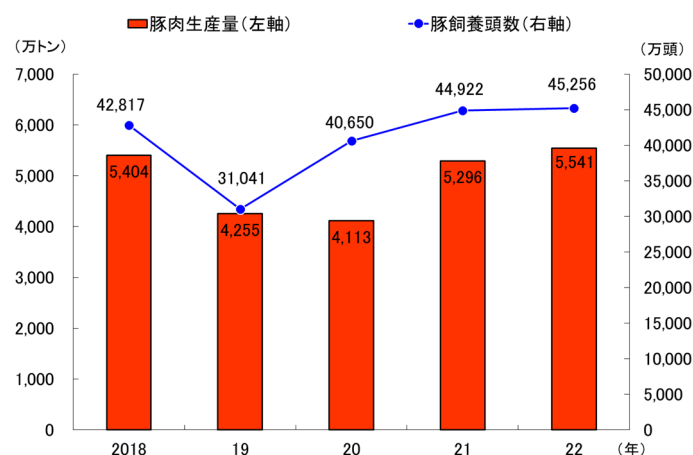


表４ 豚の出荷規模別の農場戸数（２０２２年）

（単位：万戸）

区分／規模	全体	1～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000～2,999頭	3,000～4,999頭	5,000～9,999頭	10,000～49,999頭	50,000頭以上
戸数	1,926.4	1,798.2	69.2	40.9	9.6	5.4	1.6	0.9	0.5	0.1
割合	100.0%	93.3%	3.6%	2.1%	0.5%	0.3%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鑑」

② 豚肉の需給動向

豚肉の生産量は、2014年をピークに減少傾向で推移しており、19、20年は、18年に発生したASFの影響が本格化したため生産量が大幅に減少した。しかし、21年以降は飼養頭数の増加などから生産量は急速な回復を見せ、22年にはASF発生前の水準にまで回復した（図3、表5）。

消費量は、人口増加や所得向上を背景に増加傾向で推移してきた。19、20年はASFの影響による豚肉価格の上昇などにより、需要が他の食肉に移行したことで大幅に減少したが、飼養頭数の増加につれて豚肉価格も安定したことで、22年は消費量も回復した。

22年の輸入量は、ASFの発生による国内生産への影響から増加した20年、21年に比べて大幅に減少しているものの、ASF発生前の水準を上回っている。

表5 豚肉需給の推移

(単位: 万トン)

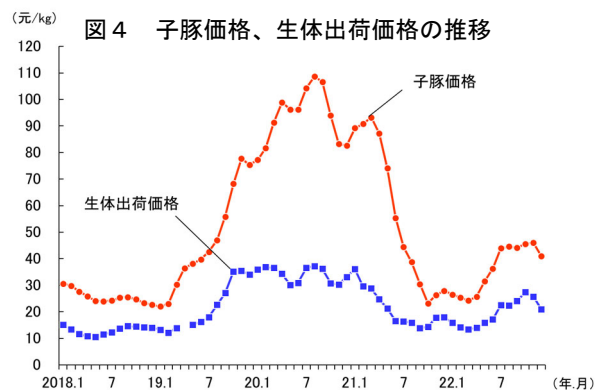
区分/年	2018	19	20	21	22
生産量	5,404	4,255	4,113	5,296	5,541
輸入量	145	245	528	433	213
輸出量	20	14	10	10	10
消費量	5,529	4,487	4,152	5,172	5,743

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、
USDA/FAS「PSD Online」（輸出入量、消費量）

注：枝肉重量ベース。

③ 豚肉の価格動向

2018年に発生したASFの影響から飼養頭数、生産量が減少したため、19年に入り生体出荷価格、子豚価格は共に急騰した（図4）。19年半ばにASFの感染リスクが低減したとの判断が大勢を占めたことで、増頭機運の高まりから子豚需要が急増し、子豚価格の上昇を牽引した。豚総飼養頭数は19年末から増加傾向を示していたが、豚肉生産量の回復までには時間を要し、20年の豚肉価格は引き続き高値で推移した。しかし、21年に入り、飼養頭数の回復と豚肉出荷量の回復により、豚肉価格は急激に下落した。22年は、9月の学校給食の再開や10月の祝日（国慶節・中秋節）などの需要期にかけて価格が上昇したが、その後は供給が増える中、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策による消費の後退から、価格は下落に転じた。



資料：中国農業農村部（子豚価格）、中国国家発展改革委員会（生体豚出荷価格）

④ その他

2018年8月に発生したASFは中国全土に拡大し、養豚業に大きな損害をもたらした。その後の19年8月から実施された増頭対策の効果もあり、20年は急速に生産規模を拡大させ、22年にはASF発生前の水準を超えるまでに回復した。この回復期に大きく生産規模を拡大したのが大手養豚企業である。大手養豚企業は厳格な衛生管理を導入し、農場への人の出入りを最小限に抑えるなどの取り組みを行った。その最たるものとして、ビル型の養豚施設が挙げられ、大きいものでは20階建て以上の養豚施設も存在している。



写真1 伝統的な豚肉の販売風景（山東省済南市内）



写真2 スーパーでの豚肉販売風景（北京市内）

(2) 酪農・乳業

牛乳乳製品の消費量は、人口増加や所得向上、健康志向の高まりなどを背景に増加傾向にある。2008年に発覚したメラミン混入事件は、国産育児用調製粉乳などに対する消費者の不信感から輸入需要の拡大につながったが、その後の政府や乳業による信頼回復への取り組みなどを通じ、近年は、国産需要が高まりつつある。

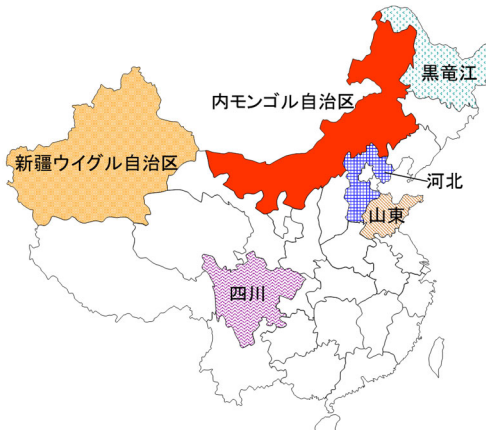
国連食糧農業機関（FAO）のデータによると、22年の中国の生乳生産量（水牛を除く）は、21年に引き続き世界第3位であり、全世界の生乳生産量の4.6%を占める。

① 乳用牛および生乳の生産動向

地域別の飼養頭数を見ると、冷涼な中国北部で多く、上位6省・自治区で全体の約6割の頭数を占めている（図5、6）。飼養頭数は国内需要を背景に2008年ごろまで急速に増加し、それ以降は横ばいで推移していた。近年は、健康志向の高まりを受け、乳製品需要が増加したことなどを背景に増加傾向で推移しており、22年は、前年比6.0%増の1160万頭となった（図7）。

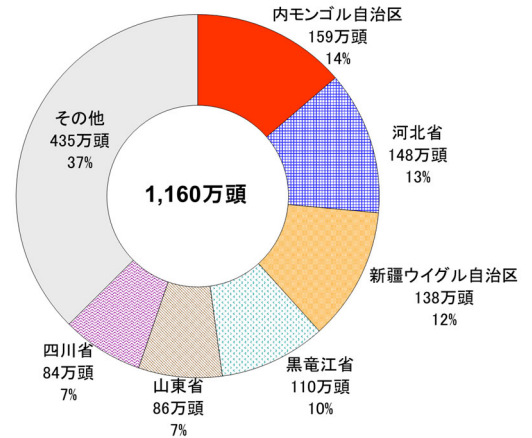
また、飼養農場の規模は、飼養頭数49頭以下の農場が全体の97.2%を占めている（表6）。

図5 乳牛飼養頭数上位6省・自治区（2022年）



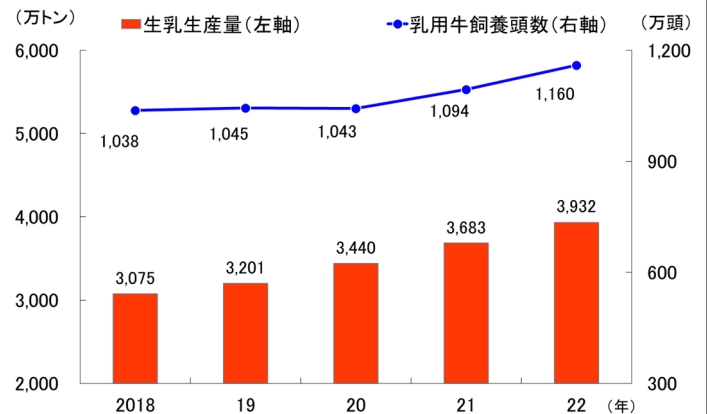
資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」

図6 省・自治区別乳用牛飼養頭数（2022年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」

図7 乳用牛飼養頭数と生乳生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生乳生産量）、中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」（飼養頭数）

表6 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2022年）

（単位：千戸）

区分／規模	全体	1～49頭	50～99頭	100～199頭	200～499頭	500～999頭	1000～1999頭	2000～4999頭	5,000頭以上
戸数	463.5	450.3	6.4	2.4	1.6	1.2	0.8	0.5	0.3
割合	100.0%	97.2%	1.4%	0.5%	0.3%	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%

資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鉴」

② 牛乳・乳製品の需給動向

生乳の生産量は増加傾向で推移する一方、乳製品の原料などに利用される全粉乳や脱脂粉乳、直接消費としての飲用乳などの輸入量は、COVID-19流行時の健康志向の高まりなどもあり、2021年までは増加傾向で推移してきた（表7）。しかし、生乳生産量の増加や乳製品の国際相場の高騰などにより、22年は、海外製品に一定の需要のある育児用調製粉乳と、製パン向け需要が堅調なバターを除き、いずれも輸入量が減少している。

表7 乳製品輸入量の推移

（単位：万トン）

区分／年	2018	19	20	21	22
全粉乳	52	67	64	85	70
ホエイ	55	45	62	72	60
飲用乳	67	89	104	127	98
脱脂粉乳	28	34	34	43	34
育児用調製粉乳	33	36	35	27	28
チーズ	10.8	11.5	12.9	17.6	14.5
バター	12.0	9.1	12.3	13.9	15.3
ヨーグルト	2.7	3.2	2.8	2.5	2.2

資料：USDA/FAS「PSD Online」（全粉乳、飲用乳、脱脂粉乳、チーズ、バター）、「Global Trade Atlas」（ホエイ、育児用調製粉乳、クリーム、ヨーグルト）

注：HSコードは、ホエイは040410、育児用調製粉乳は190110、ヨーグルトは040310。

乳製品のうち、多用途で用いられる全粉乳（育児用調製粉乳や還元乳のほか、ヨーグルト、アイスクリーム、焼き菓子などの原料）の需給を見ると、22年の消費量は前年比3.3%減の175万トンとなった（表8）。また輸入量は、近年、増加傾向で推移していたが、乳製品の国際相場の高騰を受けた需要低下などを受け、22年は同17.6%減の70万トンと大幅に減少した。主な輸入先はニュージーランドであり、同国は中国とのFTA締結による関税削減の恩恵を受けて^{（注）}全粉乳輸入量の約9割を占めている。

注：枠内無税（2020年）。枠外の最恵国税率は10%。

詳細は『畜産の情報』2016年9月号「中国の牛乳・乳製品をめぐる動向～産業構造の変化と今後の国際需給への影響～」

（<https://lin.alic.go.jp/alic/month/domefore/2016/sep/wrepo02.htm>）をご参照ください。

表8 全粉乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2018	19	20	21	22
生産量	97	105	99	101	105
輸入量	52	67	64	85	70
輸出量	0.2	0.1	0.1	0.2	0.3
消費量	153	172	159	181	175

資料：USDA/FAS「PSD Online」

また、脱脂粉乳は、全粉乳に比べて消費量は少ないが、近年は増加傾向で推移していた。一方、22年は全粉乳と同様に、輸入量も消費量も減少している（表9）。脱脂粉乳は、中国国内でバターやクリームを製造する設備が少ないため、国内生産よりも輸入量が多いことが特徴的である。

表9 脱脂粉乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2018	19	20	21	22
生産量	2.0	1.5	2.0	2.2	2.5
輸入量	28	34	34	43	34
輸出量	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1
消費量	30	36	36	45	36

資料：USDA/FAS「PSD Online」

飲用乳の消費量は、15年をピークに減少していたが、18年以降は増加に転じており、22年は前年比5.4%増の4130万トンとなった（表10）。特にCOVID-19流行下では、政府が乳製品の消費を推奨したことも消費量の増加に寄与している。

表10 飲用乳需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2018	19	20	21	22
生産量	3,225	3,298	3,550	3,795	4,035
輸入量	67	89	104	127	98
輸出量	2.7	2.5	2.5	2.3	2.4
消費量	3,290	3,384	3,652	3,920	4,130

資料：USDA/FAS「PSD Online」

英国の市場調査会社であるユーロモニターインターナショナル社によると、22年の主な牛乳乳製品の小売販売数量について、ヨーグルトが減少しているのに対し、牛乳とチーズは増加しており、中でも、チーズはかなりの程度増加している（前年比13.1%増：表11）。牛乳について

は、特に地方のコールドチェーンが未成熟なことから、ロングライフ（LL）牛乳が広く普及（牛乳販売量の8割程度）しているが、近年では都市部を中心にコールドチェーンが整備され、価格の高い冷蔵牛乳も流通している。ヨーグルトについては、飲むタイプのヨーグルトを中心に普及している。また、チーズは、プロセスチーズが販売量の8割程度を占め、ピザやハンバーガーなど外食需要を中心に消費が広がってきた。近年では、子供向けのスティックチーズなどを中心に、家庭内消費も増加しつつある。

表 1-1 主な牛乳乳製品の小売販売数量の推移

(単位: 万トン、千万リットル)

区分／年	2018	19	20	21	22
牛乳	885	900	943	988	1,019
うちLL	741	747	784	806	819
うち冷蔵	144	153	158	183	200
プレーバール	648	614	565	595	592
ヨーグルト(液体)	750	820	805	778	748
ヨーグルト(それ以外)	180	183	173	165	154
チーズ	4.0	5.2	7.4	9.6	10.8

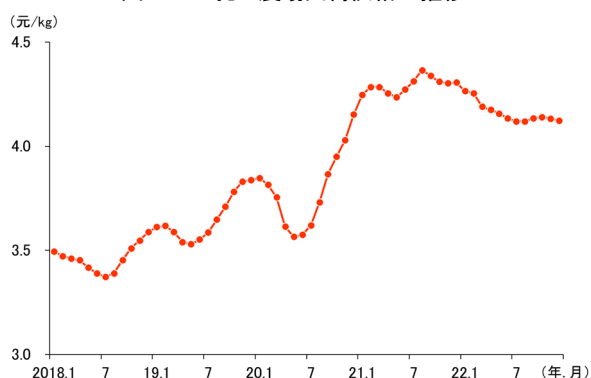
資料：ユーロモニターインターナショナル社

注：ヨーグルト（液体）はリットル、それ以外はトン。

③ 生乳価格動向

生乳価格は、2013年夏の記録的な猛暑で生産が減少したことで同年後半から上昇したが、その後下落し、15年以降は安定して推移していた。19年以降は季節的な変動はあるものの堅調な需要に後押しされ、上昇傾向にある（図8）。特に20年末からは1キログラム当たり4元を超えており、22年は価格がやや下がっているものの同水準を維持している。

図 8 生乳の農場出荷価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要生産省・自治区（河北、山西、内モンゴル、遼寧、黒竜江、山東、河南、陝西、寧夏、新疆）における農場出荷価格の平均。これら10省・自治区で生乳生産の8割を占める。

④ 販売風景

中国では多くの冷蔵牛乳が紙パック容器ではなく、ペットボトルで販売されている（写真3）。常温保存が可能なLL牛乳は、飲みきりサイズのを10～20個程度（写真は250ml×10個入り）まとめて箱詰めし、目立つ印刷を施して売られている点が特徴的である（写真4）。

また、乳製品は贈答品としても利用されており、綺麗に包装された輸入品のホエイパウダーなども販売されている（写真5）。



写真 3 スーパーでの乳製品の販売状況（北京市内）



写真 4 山積みで販売されているLL牛乳（北京市内）



写真 5 贈答向けの輸入ホエイパウダー（北京市内）

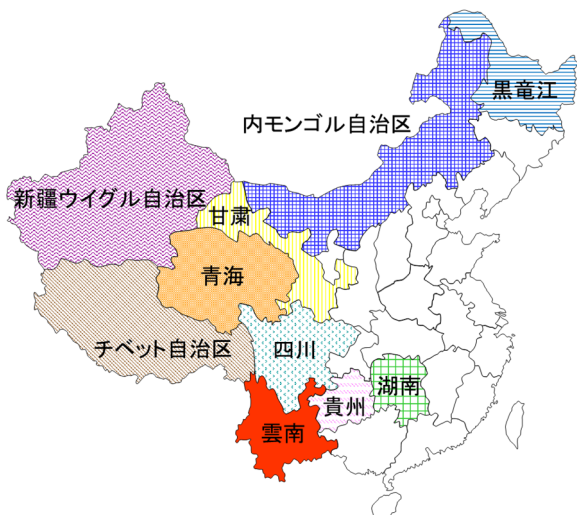
(3) 肉牛・牛肉産業

① 飼養動向

中国で商業的な肉用牛の生産が始まったのは1990年代と言われており、それまで牛は、主に役畜として飼われていた。肉用牛として飼育されているのは、主に黄牛（在来種）とシンメンタール種の交雑種である。最近では、品種改良の観点などからアンガス種などの生体牛輸入も増えている。

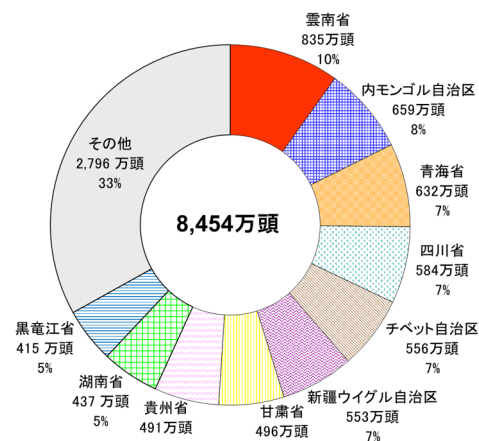
飼養頭数を地域別に見ると、役畜として利用されてきた内陸部での飼養頭数が多く、飼養頭数が400万頭以上の上位10省・自治区で全体の約7割を占めるなど偏在している（図9、10）。また、零細な飼養農家が極めて多いのも同様で、年間出荷頭数が9頭以下の農場が全体の92.0%を占めている（表12）。

図9 肉用牛飼養頭数上位10省・自治区（2022年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

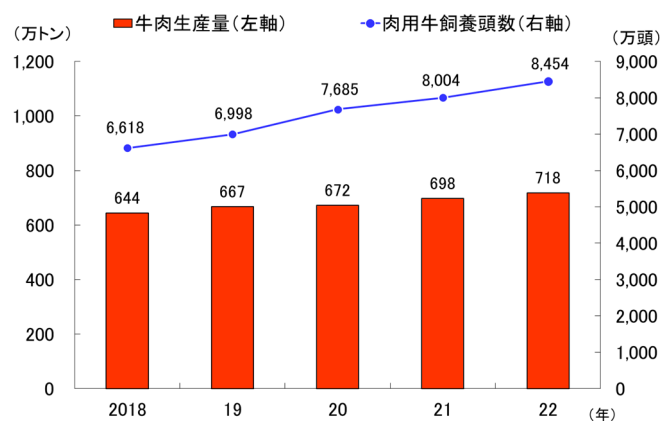
図10 省・自治区別肉用牛飼養頭数（2022年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

飼養頭数と牛肉生産量の推移を見ると、共に増加傾向で推移しており、2022年の飼養頭数は8454万頭、牛肉生産量は718万トンとなった（図11）。米国農務省によると、22年の中国の牛肉生産量は、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位（米国の5割強）であり、全世界の生産量の約1割を占めている。また、中国の牛肉は伝統的に豚肉を食さないイスラム教徒による消費が多く、ハラールの牛肉が多く売られているのも特徴とされる。

図11 肉用牛飼養頭数と牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」（飼養頭数）

表12 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2022年）

（単位：万戸）

区分／規模	全体	1～9頭	10～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000頭以上
戸数	757.8	696.9	48.9	9.0	2.6	0.3	0.1
割合	100.0%	92.0%	6.5%	1.2%	0.3%	0.04%	0.01%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

② 需給動向

牛肉消費量は長期にわたって増加を続けており、2022年は1066万トンとなった(表13)。一方、国内の牛肉生産量は増加しているものの、拡大する需給ギャップを埋めるべく、輸入量も急増している。同年の主な輸入相手先はブラジル(輸入量全体の4割弱)、アルゼンチン(同2割)、ウルグアイ(同1割強)、ニュージーランド(同1割弱)となった。現地専門家の中では、これ以外に統計に表れない相当量の非正規輸入品が中国の国内市場に流通しているとの見方もあるが、詳細は不明である。

表13 牛肉需給の推移

(単位: 万トン)

区分/年	2018	19	20	21	22
生産量	644	667	672	698	718
輸入量	137	218	278	302	350
輸出量	2.1	2.1	1.6	1.7	2.0
消費量	781	883	949	999	1,066

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」(生産量)、
USDA/FAS「PSD Online」(輸出入量、消費量)

注：枝肉重量ベース。



写真6 スーパーでの冷蔵牛肉販売風景（上海市内）

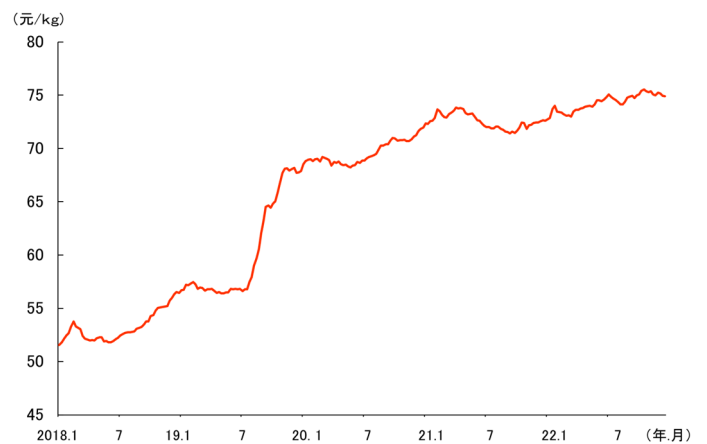


写真7 スーパーでの冷凍牛肉販売風景（北京市内）
「和牛」ラベルが貼られた豪州産 WAGYU も販売されている。

③ 価格動向

牛肉の卸売価格は、需要の拡大に伴い2014年に高水準となったが、15年後半以降は輸入量の増加から下降基調で推移していた。18年以降は、中国国内でのASF発生の影響による豚肉価格の上昇に伴う代替需要や、外食需要の高まりなどから、一転して上昇傾向で推移した(図12)。21年に入りやや下落に転じたものの、後半以降は持ち直し、22年も引き続き高値で推移している。

図12 牛肉卸売価格の推移



資料：中国商務部



写真8 スーパーでの冷凍牛肉販売風景（北京市内）。
「清真」（ハラール）マークがついている商品も多い。

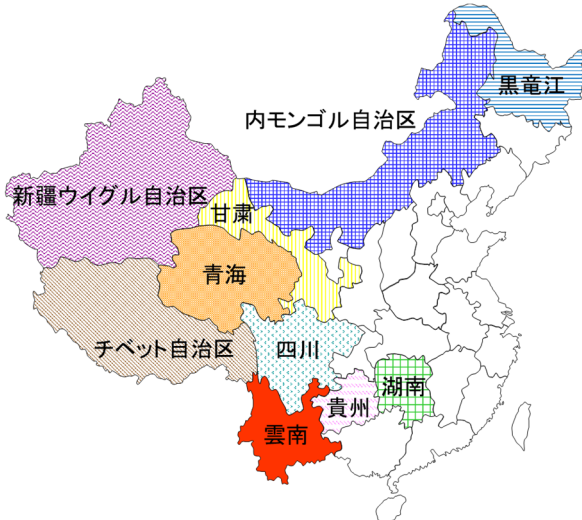
（４）肉用鶏・鶏肉産業

① 飼養動向

鶏肉は、豚肉に次いで多く消費される食肉である。肉用鶏の品種は、約半数が白羽肉鶏と呼ばれる海外品種であり、残りは黄羽肉鶏と呼ばれる在来品種などである。近年では小型の白羽肉鶏の育種・改良により、独自品種の普及が進められている。

地域別の飼養羽数を見ると、渤海沿岸部から内陸部での飼養が多く、上位7省で全体の5割強を占めている（図13、14）。家きんの飼養羽数は、2013年に発生した鳥インフルエンザにより一時的に減少したが、その後は増加に転じている。また、18年に発生したASFの影響により豚肉生産量が減少したことから鶏肉の代替需要が高まり、19年以降は増加基調にある（図15）。ただし、飼養規模は零細なものが極めて多く、年間出荷羽数が2000羽に満たない経営が98.7%を占めている（表14）。

図13 家きん飼養羽数上位7省

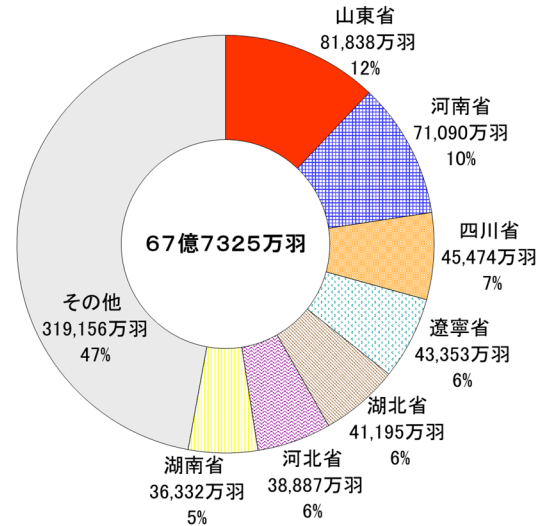


資料：中国農業部 「中国畜牧獣医年鑑」

22年の家きん肉の生産量は、1430万トン（前年比2.7%減）とわずかに減少した（図15）。米国農務省によると、中国の鶏肉生産量は米国、ブラジルに次いで世界第3位となり、世界の生産量の14.0%を占めている。

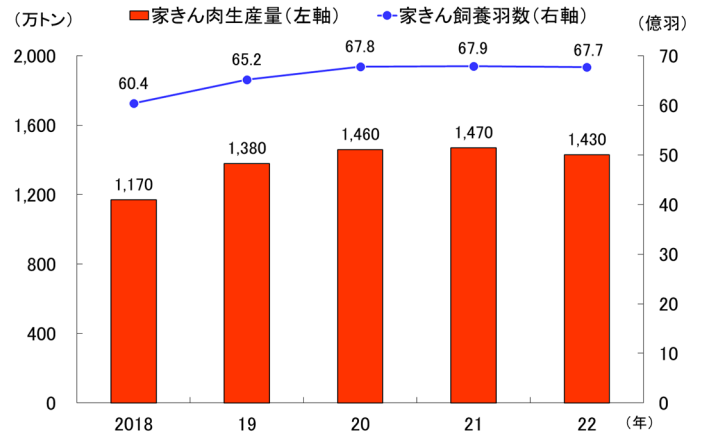
（注）「家きん」はブロイラー（肉用鶏）や採卵鶏、アヒルなど。

図14 省・自治区別家きん飼養羽数（2022年）



資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図15 家きん飼養羽数と家きん肉生産量の推移



資料：USDA/FAS「PSD Online」（生産量）、中国農業部「中国畜牧獣医年鑑」（飼養羽数）

表14 家きん（肉用）の出荷規模別の農場戸数（2022年）

		(単位: 万戸)							
区分／規模	全体	1～1,999羽	2,000～9,999羽	1万～29,999羽	3万～49,999羽	5万～99,999羽	10万～499,999羽	50万～999,999羽	100万羽以上
戸数	1,809.2	1,785.4	12.3	5.4	2.7	1.9	1.2	0.2	0.2
割合	100.0%	98.7%	0.7%	0.3%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

22年の鶏肉輸入量は、63.3万トンと前年を大幅に下回った。これは、20年に豚肉からの代替需要で鶏肉輸入量が急増し、その後は徐々に減少したことによるものであるが、19年以前の輸入量を上回っている。また、代替需要が落ち着く中で、COVID-19対策として行われた移動制限による物流への影響もあったとみられる。

一方、22年の鶏肉輸出量は、鶏肉調製品を主体に53.2万トンと前年を大幅に上回った。主な輸出相手先は日本（輸出量全体の約6割）となっている。同年の日本向けは、COVID-19の影響により業務用需要が低迷していたものの、惣菜用などを中心に数量を伸ばしたとみられる（表15）。

また、鶏肉の卸売価格を見ると、16年12月以降、国内でヒトへの鳥インフルエンザ（H7N9型）の感染が多数報告されたことで、政府による生体家きん市場の閉鎖から直接小売店への丸どり供給量が増加したため、17年に入り大きく下落した。その後は供給量が安定し、同年後半以降は上昇基調で推移したが、ASFの流行による豚肉生産量の減少から、鶏肉需要が拡大した影響で、19年の卸売価格は高騰した（図16）。19年末から20年にかけて、鶏肉の供給体制がある程度整ったことに加えて、COVID-19の感染拡大により、卸売価格は急落したが、20年後半以降は、外食需要が多少の回復を見せたことから緩やかに上昇基調で推移した。



写真9 市場での丸どり販売風景（山東省済南市内）

（5）飼料穀物

中国はトウモロコシを重要作物の一つと位置付け、需給の安定を図るための穀物備蓄政策を実施してきた。しかし、最低買付価格を保証する備蓄政策の実施などでト

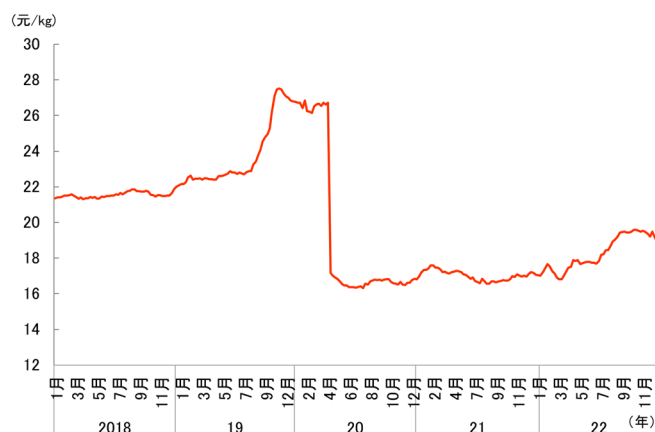
豚肉価格が高騰していた22年後半は、代替需要などから鶏肉も同様に高値で推移していたものの、豚肉価格の下落に合わせて22年末から下落傾向で推移している。

表15 鶏肉需給の推移
(単位:万トン)

区分/年	2018	19	20	21	22
生産量	1,170	1,380	1,460	1,470	1,430
輸入量	34.2	58.0	99.9	78.8	63.3
輸出量	44.7	42.8	38.8	45.7	53.2
消費量	1,160	1,395	1,521	1,503	1,440

資料：USDA/FAS「PSD Online」

図16 鶏肉（丸どり）の卸売価格の推移



資料：中国農業部「中国農業発展報告」



写真10 市場での生鳥販売風景（山東省済南市内）

ウモロコシ在庫が積み上がったことから、2016年4月にはこの保証政策を見直し、市場買い付けに移行した。

近年のトウモロコシの国内生産量は、飼料需要の拡大などを背景に増加基調にあり、2022/23年度は過

去最高を記録した（表16）。また、消費量も飼料向けを中心に増加基調で推移している。生産量が増加する中で、同年度の輸入量は2千万トン台を割り込んだ。生産量を地域別に見ると、東北3省（黒竜江、吉林、内モンゴル自治区）で全体の3分の1、さらに上位10省で約8割を占めている（図17、写真11）。

表16 トウモロコシ需給の推移

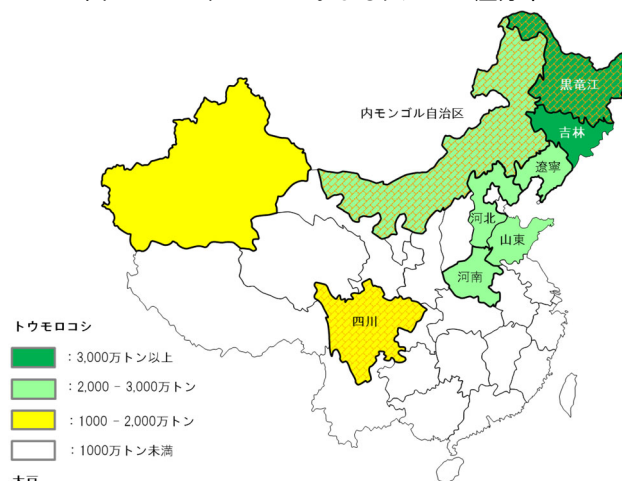
(単位: 万吨)					
年度	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23
作付面積(万ha)	4,213	4,128	4,126	4,332	4,307
総供給量	48,420	47,854	49,071	50,014	50,505
国内生産量	25,717	26,078	26,067	27,255	27,720
期首在庫	22,254	21,018	20,053	20,570	20,914
輸入量	448	758	2,951	2,188	1,871
総需要量	27,402	27,801	28,500	29,103	29,900
国内消費量	27,400	27,800	28,500	29,100	29,900
飼料向け	19,100	19,300	20,300	20,900	21,800
食用・工業向けなど	8,300	8,500	8,200	8,200	8,100
輸出量	2	1	0	0	1
期末在庫	21,018	20,053	20,570	20,914	20,604

資料: USDA/FAS「PSD Online」

注1: 生産年度は10月～翌9月。

注2: 総需要量＝国内消費量＋輸出量。

図17 トウモロコシおよび大豆の生産分布



資料: 中国国家统计局



写真11 中国のトウモロコシ畑（吉林省）

一方、大豆については、食用油原料用途のみならず、搾油後の大豆かすが家畜飼料原料に利用されており、これら国内需要の拡大を背景に大量に輸入されている。22/23年度を見ると、大豆の国内生産量2028万トンに対し、輸入量は1億450万トンと過去最高を記録した（表17）。中国政府は国産大豆の増産を振興しているが、需要に追いつかない状況が続いている。このように、中国は大量のトウモロコシや大豆の輸入を行っていることから、世界の穀物相場を大きく左右させる存在となっている。

表17 大豆需給の推移

(単位: 万吨)					
年度	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23
作付面積(万ha)	841	933	988	842	1,024
総供給量	12,107	13,497	14,383	13,555	14,993
国内生産量	1,597	1,809	1,960	1,640	2,028
期首在庫	2,256	1,835	2,448	2,886	2,515
輸入量	8,254	9,853	9,974	9,030	10,450
総需要量	10,272	11,049	11,497	11,040	11,759
国内消費量	10,260	11,040	11,490	11,030	11,750
飼料向け	430	480	520	500	550
工業向け	8,500	9,150	9,500	9,000	9,600
食用向け	1,330	1,410	1,470	1,530	1,600
輸出量	12	9	7	10	9
期末在庫	1,835	2,448	2,886	2,515	3,234

資料: USDA/FAS「PSD Online」

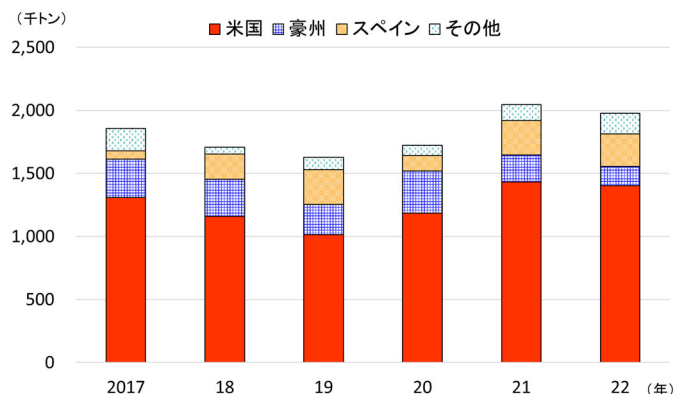
注1: 生産年度は10月～翌9月。

注2: 総需要量＝国内消費量＋輸出量。

注3: 搾油向けは「工業向け」に含まれる。

また、近年は生乳生産が拡大する中で、乳牛の飼料としてアルファルファなどの飼料の輸入量も増加基調にある（図18）。これら輸入形態は主に乾草であり、ミールやペレット状のものは少ない。近年では米国からの輸入が過半を占め、豪州やスペインが続いている。

図18 アルファルファなどの輸入量の推移



資料: 「Global Trade Atlas」

注: HSコードは1214。